

病 理 学 講 座

教授：羽野 寛	人体病理学：特に肺・肝の臓器病理学
教授：福永 眞治 (病院病理部に出向)	人体病理学：産婦人科腫瘍
教授：酒田 昭彦 (病院病理部に出向)	人体病理学：脂肪性肝疾患の進展とバルーニング変性の
准教授：鈴木 正章	人体病理学：特に泌尿生殖器・乳癌の病理
准教授：池上 雅博 (病院病理部に出向)	人体病理学：特に消化管の病理
准教授：千葉 諭	人体病理学：特に肝・骨髄・循環・隣・胎生形態学の病理
准教授：鷹橋 浩幸	人体病理学：特に泌尿生殖器、分子病理学、診断病理学
講師：野村 浩一 (病院病理部に出向)	人体病理学：特に婦人科の病理
講師：金網友木子	人体病理学：腎生検組織を中心としたヒト腎組織病理の形態的解析 (病院病理部に出向)
講師：原田 徹 (病院病理部に出向)	人体病理学：特に呼吸器疾患、肝疾患
講師：鹿 智恵	がんの発生・進展に関連する責任遺伝子の検索：特に肝がん、肺がん

教育・研究概要

I. 肝臓に関する研究

1. 非アルコール性脂肪性肝炎 (NASH) の線維化過程の研究を継続した。前年報で報告のように、NASH の線維化過程は隣接する中心静脈相互の架橋性線維化が先行し、門脈域は温存される傾向にある。NASH が肝硬変に移行することを考慮すれば、小葉構造の維持されているこの時期は precirrhotic stage と位置付ける事ができる。今回架橋性線維化が高度に進展した剖検例の組織再構築による検討においても、この架橋線維化は殆どが中心静脈間を結ぶ線維化であり、中心静脈域と門脈域との線維性連結を示したのは僅かであった。結果的に中心静脈を含む線維化域は網状となり、網目の中に門脈域が分布するという構図を示し、いわゆるうっ血性肝硬変を想起させる変化であった。門脈枝の検討では、予

想通り門脈枝には大きな傷害のないことが示された。この症例でも静脈に絡みつくように走行する顕著な動脈の発達がみられた。この動脈は門脈域の動脈と連続しており、既存の動脈由来であることが確認された。precirrhotic stage からどのような血管構築の変化を経て硬変肝に移行するのか、今後の課題として残った。また非平衡系における、散逸構造 (自己組織化) を考える上で一つの資料を与えてくれた。

2. 非アルコール性脂肪性肝炎を対象に、その発生と進展機序について特にバルーニング変性に注目し、検討した。バルーニング変性は小葉中心域、線維化巣周囲で目立ったが、必発ではなく、また、脂肪変性、炎症との関わりも乏しかった。さらに、バルーニング変性とその前段階の変化を検討すべく、電顕検索を行ったが、電顕ではバルーニング変性は同定できなかった。

3. 肝内異常血路の見られた2剖検例について、肝腫瘍の発生と異常血管の存在との因果関係を検索した。現在のところ結論を得るまでに至っていないが、連続切片による追究の準備を整えた。

4. 我々は肝細胞がんの発生と転移過程に関連する真の責任遺伝子を同定することを目指し、候補領域 8p22-23 から *DLCL1*, *DBC2*, *MTUS1* などを含む10数個の候補遺伝子を選出し、様々な手法を用いて挑戦的な研究を行ってきた。その結果、いずれの遺伝子においても、有意な突然変異が認められなかったことから、これらの遺伝子が塩基配列の変化により直接的に肝細胞がんの発生に関与する可能性の低いことが示唆された。

5. 常染色体優性多発性嚢胞腎 (ADPKD) における肝嚢胞病変について、連続組織切片を作成し組織構造を再構築し形態解析を行った。

II. 腎臓に関する研究

腎生検症例を中心として、内外の施設の症例について、合同で検討、協議する活動を行った。特発性および薬剤性間質性腎炎について、腎組織中の間質傷害の出現パターンを解析し、腎間質傷害の多くは髓放線領域から出現する傾向にあるという知見が得られた。

III. 消化管に関する研究

1. 非腫瘍性大腸ポリープについてまとめた。過去5年間に集積された大腸ポリープは、5,058病変で、そのうち4,362病変86.2%が腫瘍性病変であった。残り696病変13.8%が非腫瘍性ポリープであった。非腫瘍性ポリープの内最も多い病変が過形成性ポ

リープで259病変37.2%，次いで若年性ポリープ121病変17.3%であった。それぞれのポリープの組織上の特徴についても検索した。

2. 消化管の間葉系腫瘍に関して，免疫組織化学染色を中心に形態診断の総説をまとめた。

IV. 呼吸器に関する研究

中心性肺気腫に関して，肺の厚切り標本を用い肺気腫のmorphogenesisについての考察を行ってきた。引き続き，正常肺と気腫肺について，連続する厚切り標本および5ミクロンの連続切片を用いて組織立体再構成を行い，血管構築の変化を追究した。正常肺では肺動脈は規則的に分岐して整然とした分布を示す。さらに肺静脈は，この肺動脈枝に嵌合するように枝を伸ばしている。肺気腫になると，高度の障害領域では肺動脈密度は明らかに減少し，分岐を失った肺動脈が単純走行しているのが見られた（いわゆる宙吊り血管）。これは肺胞の破壊に端を発する肺構造破壊の結果を反映しているものと考えられる。

V. 泌尿生殖器に関する研究

1. 腎細胞癌について，腎癌取扱規約にそって所見をとり，症例の集積をしている。特に規約のstage分類に変更があったので，今までの症例の再評価を行っている。

2. 前立腺癌の研究では，臨床癌におけるpAKTとERGの発現の関連を調べた。pAKTは日本人前立腺癌の約半数，ERGは約25%に発現しており，pAKTの発現強度とERGの発現には逆相関がみられた。したがってこの2つの癌化経路の関連性は薄く，お互い独立したものであることが示唆された。今世紀に入ってからの前立腺癌発生の動向を知るため，2008～11年の剖検例におけるラテント癌の頻度，癌体積，年齢などのデータを過去（1980年代）の慈恵医大のデータと比較検討したところ，癌の出現頻度は倍増し，ことに大型の癌が増えていることを見出した。また前立腺肉腫の1例報告の指導を行った。

3. 欧米人の約50%の前立腺癌はERGとTM-PRSS2の遺伝子融合により発癌していることを近年報告した。しかし，アジア人におけるERGの発現はあまり詳細に検討されていない。欧米の検討に続きアジア人，特に日本人に焦点をあて研究している。

VI. 産婦人科に関する研究

子宮内膜のatypical polypoid adenomyomaについて，自験例，班会議症例50例を用いて臨床病理学的に検討した。内膜搔爬材料による病理診断は容易ではなくendometrioid adenocarcinomaとoverdiagnosisされる症例も少なくない。以前の報告以上に像が多彩で筋層内に進展する症例，腺筋症内の病変もみられる。15例でendometrioid adenocarcinomaの合併が見られたが，予後は良好で死亡例はない。再度の内膜搔爬，hormone療法症例で子宮摘出された症例では全例において病変の残存が見られた。治療は妊孕性を強く希望する症例以外は子宮摘出が適応とされる。

VII. 乳腺に関する研究

乳腺良悪境界病変を約191例集め，電算化した。これらの症例は病理医により，良性（過形成）～悪性（非浸潤性乳管癌）まで診断にばらつきがあり，これらをアクチン，p63，CD10の免疫染色で検討した。管内の増生部位にまで筋上皮が陽性である（二相性が明瞭である）場合，乳頭腫であり，良性である。ところが，管の周囲のみの陽性所見である（筋上皮がある）場合，良悪の判定にばらつきが出ることが分かった。

VIII. その他の研究

1. 日常の病理診断で経験される稀な症例の組織学的，免疫組織学的検討の一環として，直腸goblet cell carcinoidにganglion neuromaを合併した症例，および胃原発benign mesenchymal tumorの症例，primitive neuroectodermal tumor of the prostateの症例について検索した。

2. 静脈硬化症による虚血性腸炎に腸嚢胞状気腫症の合併した一例について，臨床病理学および文献的考察を行った。

「点検・評価」

スタッフおよび基本的業務：業務は教育，研究，診断業務である。講座は主として教育，病院病理部は主として病理診断業務を担っているが，この基本的役割分担は本年も変わらない。平成23年4月時点でのスタッフの体制は，病理学講座は，教授1人，准教授3人，講師1人，助教2人，本院病理部は准教授1，講師2，助教6（内1人国内留学，1人休職）のスタッフでスタートした。分院病理部の陣容は葛飾医療センター（旧青戸病院）病院病理部は教授1，第三病院病理部は教授1，柏病院病理部は講

師1, 助教1である。

本年より3人の新人(1人は病理経験者)が加わり, 病理医不足解決に向けての曙光とならん事が大きい期待される。なお青戸, 第三病院の病院病理部においては, 引き続き外部から臨時に病理医の応援を得て, 業務を遂行した。

教育: 基本的に昨年度と変わらない。座講については, 3年生コース臨床基礎医学I, 4年生コース臨床医学を中心に病理学関連科目の講義が行われた。前者では主に病因病態, 炎症, 代謝, ヒトの時間生物学, 腫瘍などのユニットにおいて病理学関連の講義を受け持った。臨床医学Iは臓器別疾患となるが, 多くのユニットに参加して, 疾患の病理学的側面について講義し, 病理に課せられた責務を果たした。4年生の講義は昨年度より70分に短縮され, 今年度もそれに相応しい教え方が要求された。演習, 実習関係では大きなものとして, 3年ユニット病理学総論実習, 4年ユニット病理学各論実習がある。総論実習については週1回, 4月~7月, 各論実習については週1回, 5月~11月に行われそれぞれ終了した。実習指導形式に関しては従来の形式を踏襲, 本年も学生をグループ分けして細かい指導を心掛けた。その他, 3年症候学演習, 研究室配属, 6年選択実習にも参加した。選択実習は昨年と同様に3フェーズまで学生を取った。昨年より取り入れた, 薄切, 染色, 電顕などの実習は概ね好評であった。CPCについては, 研修医を対象とするCPCに3年生から6年生まで参加し, 順調に行なわれたが, 学生にとっては理解が難しいという意見があったため, 学生にも理解できるように, 略語や術語の使い方に気をつけ, また丁寧な説明を心掛けてもらった。

病理診断業務および病理解剖: 病院病理部では, 1年間(2011年1~12月)約16,557件の手術・生検検体, 約17,116件の細胞診の診断業務が行なわれた。各分院においても同様に多くの検体の処理と診断が行われた。協力と努力により大過なく業務を進めてきたことは評価されてよい。病理解剖の数は1年間(2011年1~12月)41件で, ついに50件を下回った。臨床には剖検から学ぶという実証の態度がなお一層求められるし, 我々も臨床の納得いく剖検報告を出せるように努力する必要がある。

研究: 病理学講座・病院病理部は, 本学の伝統である人体病理を中心に, 診断病理, 臓器病理学などの研究活動を行なっている。臓器病理学では肝臓, 肺, 肺を中心に行なわれた。診断病理学では, 腫瘍関連が主で, 消化管, 前立腺, 乳腺, 女性生殖器等について行なわれた。また前立腺癌, 肝臓癌

についてはその pathogenesis について分子生物学的研究がなされた。診断業務や教育などの日常業務に時間がとられるという, 研究遂行には厳しい環境には変わりがなかったが, 地道に行なうことが大切であろう。得られたデータや資料を基に考えを纏める事は有意義で, そのためには論文という形で著わす努力が求められる。また若手研究者が症例発表を行なったが, 形態学の習得にはある程度の経験が必要であるので, こういう事の積み重ねは将来大きな意味を持つてくると思われる。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Hayashi N, Matsushima M, Yamamoto T, Sasaki H, Takahashi H, Egawa S. The impact of hypertriglyceridemia on prostate cancer development in patients aged ≥ 60 years. *BJU Int* 2011; 109(4): 515-9.
- 2) Akamatsu S, Takata R, Haiman CA, Takahashi A, Inoue T, Kubo M, Furihata M, Kamatani N, Inazawa J, Chen GK, Marchand LL, Kolonel LN, Katoh T, Yamano Y, Yamakado M, Takahashi H, Yamada H, Egawa S, Fujioka T, Henderson BE, Habuchi T, Ogawa O, Nakamura Y, Nakagawa H. Common variants at 11q12, 10q26 and 3p11.2 are associated with prostate cancer susceptibility in Japanese. *Nat Genet* 2012; 44(4): 426-9.
- 3) Onda S, Okamoto T, Kanehira M, Fujioka S, Harada T, Hano H, Fukunaga M, Yanaga K. Histopathologically proven autoimmune pancreatitis mimicking neuroendocrine tumor or pancreatic cancer. *Case Rep Gastroenterol* 2012; 6(1): 40-6.
- 4) Kano A, Ujita M, Kobayashi M, Sunakawa Y, Shirahama J, Harada T, Kanehira C, Fukuda K. Radiographic and CT features of radiation-induced organizing pneumonia syndrome after breast-conserving therapy. *Jpn J Radiol* 2011; 30(2): 128-36.
- 5) Wakui S, Motohashi M, Muto T, Takahashi H, Hano H, Jutabha P, Anzai N, Wempe MF, Endou H. Sex-associated difference in estrogen receptor β expression in N-methyl-N'-nitro-N-nitrosoguanidine-induced gastric cancers in rats. *Comp Med* 2011; 61(5): 1-7.
- 6) Hara H, Araya J, Takasaka N, Fujii S, Kojima J, Yumino Y, Shimizu K, Ishikawa T, Numata T, Kawaiishi M, Saito K, Hirano J, Odaka M, Morikawa T, Hano H, Nakayama K, Kuwano K. Involvement of creatine kinase B in cigarette smoke-induced bronchial epithelial cell senescence. *Am J Respir Cell Mol*

- Biol 2012; 46(3) : 306-12.
- 7) Matsumoto N, Umezawa T, Sasaki T, Nakajima K, Kanetsuna Y, Sasaki H. Clinical and prognostic value of the presence of irregular giant nuclear cells in pT1 ovarian clear cell carcinoma. *Pathol Oncol Res* 2011; 17(3) : 605-11.
 - 8) Derosa CA, Furusato B, Shaheduzzaman S, Srikanthan V, Wang Z, Chen Y, Siefert M, Ravindranath L, Young D, Nau M, Dobi A, Werner T, McLeod DG, Vahey MT, Sesterhenn IA, Srivastava S, Petrovics G. Elevated osteonectin/SPARC expression in primary prostate cancer predicts metastatic progression. *Prostate Cancer Prostatic Dis* 2012; 15(2) : 150-6. Epub 2011 Nov 29.
 - 9) Rhim JS¹, Li H¹ (¹Uniformed Services University of the Health Sciences), Furusato B (Armed Forces Institute of Pathology). Novel human prostate epithelial cell culture models for the study of carcinogenesis and of normal stem cells and cancer stem cells. *Adv Exp Med Biol* 2011; 720: 71-80.
 - 10) Furusato E¹, Shen D², Cao X², Furusato B¹, Nussenblatt RB², Rushing EJ¹ (¹Armed Forces Institute of Pathology), Chan CC² (²National Institutes of Health) Inflammatory cytokine and chemokine expression in sympathetic ophthalmia: a pilot study. *Histol Histopathol* 2011; 26(9) : 1145-51.
 - 11) Furusato B, van Leenders GJ¹, Trapman J¹ (¹Erasmus Medical Center), Kimura T, Egawa S, Takahashi H, Furusato M, Visakorpi T (University of Tampere), Hano H. Immunohistochemical *ETS*-related gene detection in a Japanese prostate cancer cohort: diagnostic use in Japanese prostate cancer patients. *Pathol Int* 2011; 61(7) : 409-14.
 - 12) van Leenders GJ¹, Boormans JL¹, Vissers CJ¹, Hoogland AM¹, Bressers AA¹ (¹Erasmus Medical Center), Furusato B², Trapman J² (²Armed Forces Institute of Pathology). Antibody EPR3864 is specific for ERG genomic fusions in prostate cancer: implications for pathological practice. *Mod Pathol* 2011; 24(8) : 1128-38.
 - 13) Fukunaga M. Paratesticular endometriosis in a man with a prolonged hormonal therapy for prostatic carcinoma. *Pathol Res Pract* 2011; 208(1) : 59-61.
 - 14) Fukunaga M. Editorial comment from Dr Fukunaga to Glomus tumor of the kidney. *Int J Urol* 2011; 18(12) : 871-2.
 - 15) Miyoshi J, Ohba T, Fukunaga M, Katabuchi H. Clinical features of early-stage nonhydropic mole for diagnosis of persistent trophoblastic disease. *Obstet Gynecol* 2011; 118(4) : 847-53.
 - 16) Fukunaga M. Pure alveolar rhabdomyosarcoma of the uterine corpus. *Pathol Int* 2011; 61(6) : 377-81.
 - 17) Inagaki T, Fukuda T, Ohta A, Hano H. No oncogenic role for WT1 in peripheral nerve sheath tumors. *Jikeikai Med J* 2011; 58(4) : 95-102.
 - 18) Kamoi S, Ohaki Y, Mori O, Yamada T, Fukunaga M, Takeshita T. Determining best potential predictor during high-dose progestin therapy for early staged and well-differentiated endometrial adenocarcinoma using semiquantitative analysis based on image processing and immunohistochemistry. *J Nihon Med Sch* 2011; 78(2) : 84-95.
 - 19) 佐藤力弥¹, 川村 武¹, 佐々木邦明¹, 野口忠昭 (高野病院), 細野知宏¹ (¹川村病院), 池上雅博. 腸重積をきたした横行結腸巨大脂肪腫の1例. *日臨外会誌* 2012; 73(3) : 613-7.
 - 20) 梅澤 敬, 星山佳治, 落合和徳, 池上雅博. 30歳未満女性の子宮頸がんに対する意識とがん検診受診要因に関する研究. *厚生指標* 2012; 59(2) : 17-22.
 - 21) 田村休心, 荒川廣志, 月永真一郎, 小田原俊一, 湯川豊一, 松平 浩, 高原映崇, 永妻啓介, 内山 幹, 佐藤憲一, 古谷 徹, 小井戸薫雄, 大草敏史, 角谷 宏, 池上雅博, 田尻久雄. 腹腔鏡下切除を施行した胃 inverted hyperplastic polyp の1例. *Prog Dig Endosc* 2011; 79(2) : 70-15.
 - 22) 細野知宏¹, 川村 武¹, 村上慶四郎¹, 佐藤力弥¹, 野口忠昭¹, 佐々木邦明¹, 川村統勇¹ (¹秀峰会川村病院), 池上雅博. 下行結腸化膿性肉芽腫の1手術症例. *日消外会誌* 2011; 44(8) : 1039-46.
 - 23) 清水哲也, 氏田万寿夫, 沼田尊功, 原田 徹, 桑野和善, 福田国彦. TNF阻害剤使用中に *Mycobacterium avium* による気胸を呈した1例. *日呼吸会誌* 2011; 49(8) : 583-7.
 - 24) 新井俊文¹, 高崎 健¹, 大原敏哉¹, 金井信雄¹, 吾妻 司¹, 原田 徹¹ (¹佼成病院). 腹腔鏡下胆嚢摘出術時の胆石腹腔内落下により腹腔内膿瘍, 胃壁内肉芽腫を形成した1例. *日消外会誌* 2011; 44(4) : 415-21.
 - 25) 石黒晴哉, 木村貴純, 二上敏樹, 吉澤 海, 安部 宏, 須藤 訓, 相澤良夫, 酒田昭彦, 田尻久雄. 経過観察中に全身性エリテマトーデスを発症した, 肝細胞がん合併原発性胆汁性肝硬変の1例. *肝臓* 2011; 52(10) : 679-86.
 - 26) 衛藤 謙, 阿南 匡, 大熊誠尚, 藤田哲二, 柏木秀幸, 斎藤彰一, 池上雅博, 矢永勝彦. 腹腔鏡下虫垂切除術後5年以上生存した早期虫垂癌の1例. *日臨外会誌* 2011; 72(5) : 1171-5.
 - 27) 井廻良美, 神尾麻紀子, 野木裕子, 川瀬和美, 鳥海

- 弥寿雄, 内田 賢, 池上雅博. G-CSF 産生再発乳癌の1例. 日臨外会誌 2011; 72 (10): 2512-5.
- 28) 武藤篤彦¹⁾, 酒井 謙¹⁾, 兵頭洋二¹⁾, 水入苑生¹⁾, 相川 厚¹⁾, 大久保陽一郎¹⁾, 根本哲生¹⁾, 渋谷和俊¹⁾ (東邦大学), 金網友木子, 吉田雅治 (東京医科大学). 腎生検所見から何を学ぶか (No.46) 発症早期に腎生検で診断し得たりポ蛋白糸球体症の1例. 腎と透析 2012; 72(3): 395-403.
- 29) 宇野正志, 都筑俊介, 小池祐介, 畠 憲一, 波多野孝史, 岸本幸一, 吉良慎一郎, 額川 晋, 中野雅貴, 金網友木子. 右副腎に発生した炎症性偽腫瘍の一例. 泌外 2011; 24(臨増): 546.

II. 総 説

- 1) 斎藤彰一, 二上敏樹, 玉井尚人, 大谷友彦, 相原弘之, 鈴木武志, 加藤智弘, 田尻久雄, 池上雅博. 【大腸 SM 癌浸潤距離 1,000 μ m の現状と課題】「浸潤距離 1,000 μ m」の問題点・矛盾点 (課題) 臨床診断の問題肉眼型別にみた浸潤距離とリンパ節転移の観点から. Intestine 2012; 16(2): 149-56.
- 2) 中尾 裕, 斎藤彰一, 大谷友彦, 相原弘之, 鈴木武志, 加藤智弘, 田尻久雄, 池上雅博. NBI 拡大観察による病理組織学的スクリーニング検査の有用性. 日大腸検会誌 2011; 44(8): 1039-46.
- 3) 斎藤彰一, 池上雅博, 中尾 裕, 大谷友彦, 二上敏樹, 相原弘之, 加藤智弘, 田尻久雄, Jaramillo Edgar. 【大腸鋸歯状病変と癌化】大腸鋸歯状病変の内視鏡診断 画像強調観察 (光デジタル法) 所見を中心に. 胃と腸 2011; 46(4): 428-41.
- 4) 郷田憲一, 土橋 昭, 吉村 昇, 炭山和毅, 豊泉博史, 加藤智弘, 田尻久雄, 池上雅博, 貝瀬 満. 【Barrett 食道癌の診断】 主題 Barrett 食道癌の内視鏡診断 IEE を用いた拾い上げ診断のポイント. 胃と腸 2011; 46 (12): 1826-34.
- 5) 二上敏樹, 斎藤彰一, 石井宏則, 小林裕彦, 三戸部慈実, 相原弘之, 安部 宏, 田尻久雄, 池上雅博. 【大腸 SM 癌に対する内視鏡治療の適応拡大】 主題大腸 pSM 癌に対する内視鏡治療根治基準の拡大 リンパ節転移予測因子に関する検討 特殊染色による脈管侵襲判定を中心に. 胃と腸 2011; 46 (10): 1459-68.
- 6) 相原弘之, 斎藤彰一, 二上敏樹, 田尻久雄, 池上雅博. 【大腸 SM 癌の取り扱い】当科における大腸 SM 癌の内視鏡診断・治療方針. 消化器内科 2011; 52(2): 168-73.
- 7) 原田 徹, 池上雅博. 形態診断に役立つ組織化学・分子生物学消化管間葉系腫瘍の診断 免疫組織化学染色. 胃と腸 2011; 46(10): 1551-61.
- 8) 金網友木子, 山口 裕. 【腎生検診断の標準化と新分類】尿細管間質傷害の病理組織学的アプローチ. 病

理と臨 2011; 29(11): 1241-9.

- 9) 福永真治. 異型ポリープ状腺筋腫 atypical polypoid adenomyoma (APAM) の病理診断. 日婦腫瘍会誌 2012; 30(1): 1-5.
- 10) 福永真治. 【軟部腫瘍Ⅱ - 病理診断と最近の話題 -】 日常診断上おさえておきたい腫瘍 血管性腫瘍の診断のポイント. 病理と臨 2012; 30(3): 293-9.

III. 学会発表

- 1) 原田 徹, 佐藤 峻, 片木宏昭, 池上雅博, 鈴木正章, 羽野 寛. 肺厚切り標本を用いた肺気腫の観察. 第100回日本病理学会総会. 横浜, 4月. [日病理会誌 2011; 100(1): 384]
- 2) 梅澤 敬, 土屋幸子, 芦川智美, 福村絢奈, 野村浩一, 池上雅博, 山田恭輔, 岡本愛光, 落合和徳, 熊谷二郎. LSIL cannot exclude HSIL: LSIL-H (LSIL/ASC-H) の組織診による検証と文献研究. 第25回日本臨床細胞学会関東連合会学術集会. 横浜, 9月. [日臨細胞会誌 2011; 50(Suppl. 2): 541]
- 3) 小峯多雅, 鹿 智恵, 鷹橋浩幸, 千葉 諭, 鈴木正章, 池上雅博, 羽野 寛, 稲垣卓也, 水上斉之助. 輸血関連急性肺障害 (transfusion-related acute lung injury) の可能性が疑われた1剖検例. 第100回日本病理学会総会. 横浜, 4月. [日病理会誌 2011; 100(1): 373]
- 4) 鷹橋浩幸, 山本順啓, 水上斉之助, 羽野 寛. 膀胱癌 pT1 亜分類の有用性. 第100回日本病理学会総会. 横浜, 4月. [日病理会誌 2011; 100(1): 351]
- 5) 鈴木正章, 小林大剛, 羽野 寛, 千葉 諭, 鷹橋浩幸, 小峯多雅, 鹿 智恵, 加藤弘之, 原田 徹. 骨化生を示した腎細胞癌. 第100回日本病理学会総会. 横浜, 4月. [日病理会誌 2011; 100(1): 435]
- 6) 小池祐人, 鈴木正章. CD10, Ferritin, α ACT 陽性な膀胱の炎症性筋線維芽細胞性腫瘍の1例. 第100回日本病理学会総会. 横浜, 4月. [日病理会誌 2011; 100(1): 437]
- 7) 鈴木正章. 腎細胞癌の臨床病理学的分析. 第128回成医会. 東京, 10月.
- 8) 古里文吾, 木村高弘, 三木 淳, 山本順啓, 鎌田裕子, 大和田麻美子, 須藤明美, 岡安美央子, 小峯多雅, 鹿 智恵, 鷹橋浩幸, 千葉 諭, 鈴木正章, 額川 晋, 羽野 寛. 日本人前立腺癌における ERG 発現の検討. 第128回成医会総会. 東京, 10月.
- 9) Fukunaga M. (Special lecture) Histologic diagnosis of hydatidiform mole and its problems. 1st Japan-Korea-Taiwan Joint Meeting and 15th Japan-Korea Joint Meeting for Gynecological Pathology. Gyeongju, Sept.
- 10) Fukunaga M, Matsumoto T, Kaku T, Sakamoto A,

Tsuda H. Atypical polypoid adenomyoma (APA) of the uterus: a clinicopathologic study of 50 cases. 101st Annual Meeting of United States and Canadian Academy of Pathology. Vancouver, Mar.

- 11) 中村麻予, 野村浩一, 原田 徹, 小池裕人, 大熊誠尚, 柏木秀幸, 中尾 裕, 有広誠二, 池上雅博. 静脈硬化症による虚血性腸炎に腸嚢胞状気腫症の合併した一例およびその文献的考察. 第100回日本病理学会総会. 横浜, 4月.
- 12) 酒田昭彦, 島田 修, 田所嗣美, 池田奈麻子, 野木珠代, 春間節子, 真山大輔, 山口いずみ, 宮下 弓, 中井 望, 蔵田英明. 最近東京慈恵会医科大学附属青戸病院で経験したミトコンドリア糖尿病2例についての臨床病理学的検討. 第101回日本病理学会総会. 東京, 4月.
- 13) 戸田敏久, 中島 研, 齋藤 歩, 津田律子, 中野雅貴, 金網友紀子, 石塚康夫, 高野浩邦, 佐々木寛. 絨毛癌と鑑別を要した子宮頸部未分化癌の一例. 第52回日本臨床細胞学会総会. 福岡, 5月.
- 14) 中野雅貴, 金網友木子. 肺転移をきたした移行性髄膜腫 WHO Grade Iの一例. 第100回日本病理学会総会. 横浜, 4月.
- 15) 金網友木子, 中野雅貴. Pulmonary tumor thrombotic microangiopathy を発症した腹膜癌の1剖検例. 第100回日本病理学会総会. 横浜, 4月.
- 16) 福永真治. 足関節部皮膚腫瘍. 第27回日本皮膚病理組織学会. 東京, 7月.
- 17) 千葉 諭, 稲垣卓也, 鹿 智恵, 小峯多雅, 遠藤泰彦, 池上雅博, 鈴木正章, 羽野 寛. 解剖例による正常腎臓の光顕的組織計測. 第100回日本病理学会総会. 横浜, 4月.
- 18) 原田 徹, 佐藤 峻, 片木宏昭, 池上雅博, 鈴木正章, 羽野 寛. 肝内異常血路の見られた2剖検例. 第100回日本病理学会総会. 横浜, 4月.
- 19) 鹿 智恵, 羽野 寛, 池上雅博. Expression of PROM 1 protein and mRNA in human fetal and adult tissues. 第70回日本癌学会学術総会. 名古屋, 10月.
- 20) 土屋幸子, 梅澤 敬, 芦川智美, 福村絢奈, 野村浩一, 原田 徹, 池上雅博, 山田恭輔, 落合和徳, 田中忠夫. HSILを除外できないLSIL (LSIL-H) 設定の意義についての検討 LSILとASC-Hの重複症例. 第52回日本臨床細胞学会総会. 福岡, 5月.

IV. 著 書

- 1) 鷹橋浩幸訳. 第18章 男性生殖器. 豊國伸哉, 高橋雅英監訳. ロビンス基礎病理学. 第8版. 東京: エルゼビア・ジャパン, 2011. p.791-815.
- 2) 福永真治. XI. 婦人科の疾患 XI-6. 絨毛性疾患: trophoblastic disease. 日本臨床分子形態学会編. 病氣

の分子形態学. 東京: 学際企画, 2011. p.328-30.

V. その他

- 1) 鹿 智恵. 肝細胞がんの発生・進展に関連する責任遺伝子の同定. 平成22年度科学研究費補助金実績報告書 (研究実績報告書). 2011.